

東洋文庫論叢 第十九

玉篇の研究

岡井慎吾 著

財団法人 東洋文庫 刊行

圖 版 一

此の早稲田大學藏の原本玉篇は唐鈔本と稱せらる。言部に次ぐに諳部を以てすべきに今は諳部を佚したるが、古逸叢書の底本たりし寫本には猶之を存したるが故に、同叢書に覆刻せるものは諳部を有す。日部が諳部の次に來るべきは第九十三の一句にても明かなり。古逸叢書は粗寫の本を底本として用ひたれば全く其の筆致を失ひたり。

早稲田大學本の事は本書前篇四九頁七七頁を、古逸叢書本の事は同じく六六頁を參照のこと。

「漢意」也為「咍」字在 **護** 達各及廣 **諫** 大罪及廣 **詭** 日保

它部字言言是 **護** 雅護欺也 **諫** 雅諫也 **詭** 反子

賦過記馬有先生 **諄** 字言亦 **詭** 梁苗反字書 **諫** 千史反

郭氏曰詭詐也 **諄** 詭詭也 **詭** 詭安也一日諫 **諫** 字書

謀 **諄** 口田反僕書東方朔上枚舉郭舍人俱在右族明

也 **諄** 中已文類日明戲也字書詭明也 **善** 是聞反詭

詭 他勞反尔雅詭疑也郭氏曰傳云 **善** 是聞反詭

日部第九十三 凡十一字

日 日月反尚書曰皇極之數言孔安國曰日者日大其義

又孟子苟不好善則人將曰詭予既已知之矣劉熙曰

詭之自得皇也廣蒼諸云詭之顧言野王案毛詩傳詭

之漢意也過蛇字在 **護** 達各及廣 **諫** 之藥反廣 **詭** 日保

它部字言言是 **護** 雅護欺也 **諫** 雅諫也 **詭** 反子

虛賦通詭烏有先生 **諫** 字書亦 **詭** 梁苗反字書 **諫** 千史反

郭氏曰詭詐也 **諫** 詭字也 **詭** 詭安也一日諫 **諫** 字書

謀 **諄** 口田反僕書東方朔上枚舉郭舍人俱在右族明

也 **諄** 而巳文類日明戲也字書詭明也 **善** 是聞反詭

詭部第九十二 凡六字

詭 郭氏曰詭二反 **善** 是聞反尚書作善降之百祥野王案詭

詭說文觀言之也 **善** 文善也故曰吉人為善惟日不

是也又日載善論言野王案善乃也老子善行行者無速

圖 版 一一

梁大同九年云々の文は牒の後に在るを至當とす。宋本
は牒を缺くが故に最初に此の文を出したるを以て唐の上
元本めかさん爲に澤存堂にて翻刻の際は之を削れるかと
疑はれたること、本書前篇一四頁に引ける四庫全書總目
の文に見ゆ。元の泰定本に在りては梁大同九年云々の文は
牒の後に在り。

宋本に就きては本書前篇二七四頁を、泰定本に就きては
同じく三二〇頁を参照のこと。

大廣益會玉篇一部

并序

凡三十卷

梁大同九年三月二十八日黃門侍郎兼太學博士顧野王撰本唐上元元年甲戌歲四月十三日

南國處士富春孫強增加字三十卷凡五百四十

二部舊二十五萬八千六百四十一言新五萬一

千一百二十九言新舊總二十萬九千七百七十

言注四十萬七千五百有三十

昔在庖犧始成八卦暨乎蒼頡肇創六文政罷結繩

教興書契天粟書囊市妖夜哭由來尚矣爰至玄龜

龍馬負河洛之圖小雀素鱗授終之命鳳明為字

行於普率庶上助於欽明事將奉

勅宜依牒至准

勅故牒

梁大同九年三月二十八日黃門侍郎兼太學博士顧野王撰本唐上元元年甲戌歲四月十三日

南國處士富春孫強增加字三十卷凡五百四十

二部舊二十五萬八千六百四十一言新五萬一

千一百二十九言新舊總二十萬九千七百七十

言注四十萬七千五百有三十

言注四十萬七千五百有三十

圖 版 三

宋本には圖に見ゆる如く處々埋木せる處あるも、澤存堂本は悉く其の字を補へり。澤存堂本は文字修整に過ぎて宋本朴茂の氣を失へり。

澤存堂本に就きては本書前篇三四九頁を參照のこと。

圖 版 四

五音聲論を宋本に在りては反紐圖序の上に出来るに、元本に於いては序の後に次づるを常とす。

元十一行本のことは本書前篇三二一頁を参照のこと。
川瀬一馬氏は之を無刊記宋本と鑒せり。

五音聲論

東方喉聲

西方舌聲

南方齒聲

北方唇聲

中央牙聲

更便牙格行並字客

失文物之國假以書詩七步之才五音為首律與風公之為初

字有訛餘音皆失四聲之體與天地而齊生宮商角徵羽之音

與五嶽而同起但天地生於混沌不同混沌之初君子生於嬰兒

豈與嬰兒同類夫欲反字先須紐弄為初一弄不調則宮商靡次

昔有梁朝沈約創立紐字之圖皆以平書碎尋難見唐又有陽寧

公南陽釋處忠此三公者又撰元和韻譜與文約義詞理稍繁後

劣之徒尋求難顯猶如七七之字寫人會有改張紐字者不

列圖不肖再傳皆失今此列圖曉示義理易於觀於韻切之樞機

亦是詩人之鈐鍵也譜曰平聲者哀而安上聲者厲而舉去聲者

清而遠入聲者直而促候紐者皆是雙聲正在一紐之中傍出四聲

之外傍正之目自此而分清濁也故列五箇圓圖者即是五音之圖

每圖皆從五音字行皆左轉中有注說之又列二箇方圖者即是

九弄之圖圖中取一字為頭橫列為圖首目題傍正之文以別之

四聲五音九弄反紐圖

井序 沙門 殊 撰

夫文物之國假以書詩七步之才五音為首律與

文字反切為初一字有訛餘音皆失四聲之體與

天地而齊生宮商

天地生於混沌不

與嬰兒同類

則宮商靡次共

平書碎尋難見唐又有陽寧公南陽釋處忠此二

公者又撰元和韻譜與文約義詞理稍繁後劣之

徒尋求難顯猶如七七之字寫人會有改張

紐字

圖 版 五

元泰定本・五山版〔明永樂本翻刻〕共に文字の次第、注の文言全く相同じと雖も、第一行楷字の注の「報祭」末行禍字の注の「胡果切」を五山版は訛れり。明版の杜撰なるは世に定評あれば、恐らくは永樂本既に訛れるをそのまゝ翻刻せしものなるべし。

此の五山版を川瀬一馬氏は朝鮮版と鑒せることなど、本書前篇三五七頁を見よ。

[illegible][illegible]

圖 版 六

元十一行本は卷第六より頁を改めたるに、同十二行本は卷第五より直に卷第六に接して頁を改めず。又十一行本は其の各卷の目次を出せるに、十二行本は然らず。且つ文字を出す順序亦兩者互に異れり。

元十二行本に就きては本書前篇三二二頁を参照のこと。

大廣益會玉篇卷第六

部

手 部第六十六

居

收部第六十七

砵 部第六十八

與

昇部第六十九

臼 部第七十

壯

爪部第七十一

丑 部第七十二

都

門部第七十三

手 部第七十四

有

又部第七十五

手 部第六十六

手

手

掌 部第六十六

掌

掌

擊 部第六十六

擊

擊

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

掣 部第六十六

掣

掣

圖 版 七

明弘治辛酉本と慶長版(元至正丙午本翻刻)とは文字を出す順序も注文も全く相同じけれど、圖版六に示せる兩種とは相異なり。

圖版 八

右圖は元十二行本の首にある一葉なり。十一行本の零頁を便宜綴込みたるものならん。但し圖版四六の十一行本とは版式遙に異なり。

言部の次に語部、語部の次に日部あるべきことは圖版一の説明に述べたるが、左圖慶長版（元至正丙午本翻刻）はその然るを證す。

圖版 九

右圖は圖版五の左に出せるものゝ木記なり。

左圖は圖版七の右に出せるものゝ木記なり。(圖中左方の白き部分は破れを補ひて新に書かれたるものとす。)

永樂甲午良月
廣勤書堂新集

瑞樟精舍

弘治辛酉孟夏之吉

劉氏文明書堂重刊



圖 版 十

右圖の右半は慶長九年本前刻の玉篇廣韻指南の末頁、左半は其の卷一第一葉裏の一部。

左圖は慶長九年本後刻の右と同處。(圖版第七・八の左に示せる慶長版は共に此の後刻本なり)。

至正丙午良月
南山書院新栞

下

何難切易曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

左傳云下猶也難曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

何難切易曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

至正丙午良月
南山書院新栞

下

何難切易曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

左傳云下猶也難曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

何難切易曰化也天下下者上之類也說文曰底也詩云武維

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

示部第三十五字示

圖 版 十 一

此の本亦慶長版と稱する人あれど、圖版七八の左と對看せば自ら其の非を知らん。此の本に就きては本書前篇三六五頁を參照のこと。

圖 版 十二

此の本のことは本書前篇三八一頁に述べたり。蔽にサ
ン、褱にハウの音あるは俱に正しからず。當時學藝の廢れ
たるを看るべし。

圖 版 十 三

此の本に就きては本書前篇三八五頁を見よ。偓の字の注に「偓倭似人」とあるは「仙人」の訛なるべければ、著者の原本に非るべし。「見玉篇」又「玉篇」と引ける七字「玉篇無之」と注せる十六字に及べば、玉篇に依ること多きを知らん。

目録

日^二月^三肉^三人^四言^五木^六
火^七土^八金^九水^十白^{十一}風^{十二}
雨^{十三}目^{十四}耳^{十五}鼻^{十六}舌^{十七}身^{十八}
心^{十九}骨^{二十}手^{二十一}足^{二十二}鳥^{二十三}廣^{二十四}
戸^{二十五}魚^{二十六}龜^{二十七}馬^{二十八}羊^{二十九}

禾第二頁

禾^一秀^二稼^三穡^四穡^五穡^六
種^七林^八稠^九穡^十穡^{十一}穡^{十二}
稌^{十三}私^{十四}稻^{十五}穡^{十六}穡^{十七}穡^{十八}
穎^{十九}標^{二十}穗^{二十一}穡^{二十二}穡^{二十三}穡^{二十四}
秬^{二十五}稗^{二十六}秒^{二十七}稗^{二十八}稍^{二十九}季^{三十}
年^{三十一}稭^{三十二}稭^{三十三}稭^{三十四}稭^{三十五}稭^{三十六}
獲^{三十七}藁^{三十八}柜^{三十九}稽^{四十}科^{四十一}秩^{四十二}

圖 版 十 四

此の本に就きては本書前篇三八九頁を見よ。龍龕手鑑は平上去入に依りて部首を序でたるを以て之に據れる本書の卷上の部首は皆平聲字なり。言部は上卷の前半なる故に諷訓諒認の音はンに終るべきを皆ムに作れり。又詢詢の音も一材料たるべし。

圖 版 十 五

此の本のことは本書前篇三九一頁に見えたり。二十歳の筆迹としては其の老成の致に驚かざるゝものなり。

充六十五元六十五未六十六正六十七正六十八正六十九甚七十未七十一又七十二
非七十三人七十四人七十五

第一目篇

目一目二目三目四目五目六目七目八目九目十目十一目十二目十三目十四目十五目十六目十七目十八目十九目二十目二十一目二十二目二十三目二十四目二十五目二十六目二十七目二十八目二十九目三十目三十一目三十二目三十三目三十四目三十五目三十六目三十七目三十八目三十九目四十目四十一目四十二目四十三目四十四目四十五目四十六目四十七目四十八目四十九目五十目五十一目五十二目五十三目五十四目五十五目五十六目五十七目五十八目五十九目六十目六十一目六十二目六十三目六十四目六十五目六十六目六十七目六十八目六十九目七十目七十一目七十二目七十三目七十四目七十五目七十六目七十七目七十八目七十九目八十目八十一目八十二目八十三目八十四目八十五目八十六目八十七目八十八目八十九目九十目九十一目九十二目九十三目九十四目九十五目九十六目九十七目九十八目九十九目一百

慶長拾叁丁巳薙賓上旬書之畢

大倭川 多武峯 妙樂寺

平等院 於松恩 天台末流

南山 沙門賢秀法師位

廿歲之時右三卷書之者也

表紙共束糸致一細工以

傳遐代云

圖 版 十 六

和玉篇としては漢文の注の最も多きものなり。之を和玉篇中に伍せしむるは原著者の意外とする所ならん。

この本のことに就きては本書前篇三九二頁を参照のこと。

日第一

日テ陽之體也

旻ミ秋天也

時トキ春夏秋冬時也

晝ヒル日也

早ハヤ也

曙トキ也

暁トキ也

昧ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

見ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

晚マン也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

眊ミ也

晞ヒ也

晡ヒ也

曉トキ也

昭トキ也

旭トキ也

暁トキ也

从六作

𠂔

今俗皆作𠂔非

安田元仲

斯玉篇者以韻會禮部韻龍龕手鑑等校合

旃書寫者也昔慶長旃蒙大荒落稽月日

夢梅謹誌

夢梅

圖 版 十 七

この本のことに就きては本書前篇四〇三頁を参照のこと。眞草本は管見にては此の寛永癸未(十六年)本を以て最先とするが如し。

圖 版 十 八

この本のこと本書前篇四〇九頁に出づ。畫引本は管見にては此の寛文四年本を以て最先とするが如し。

圖 版 十九

右圖は本文の初頁を示し、左圖は第十七葉の表を示す。
文章にて説明するは圖に表はし難き場合を常とするに拘
はらず、左圖中の「友」の如く解と圖と俱にあるは稀なり。

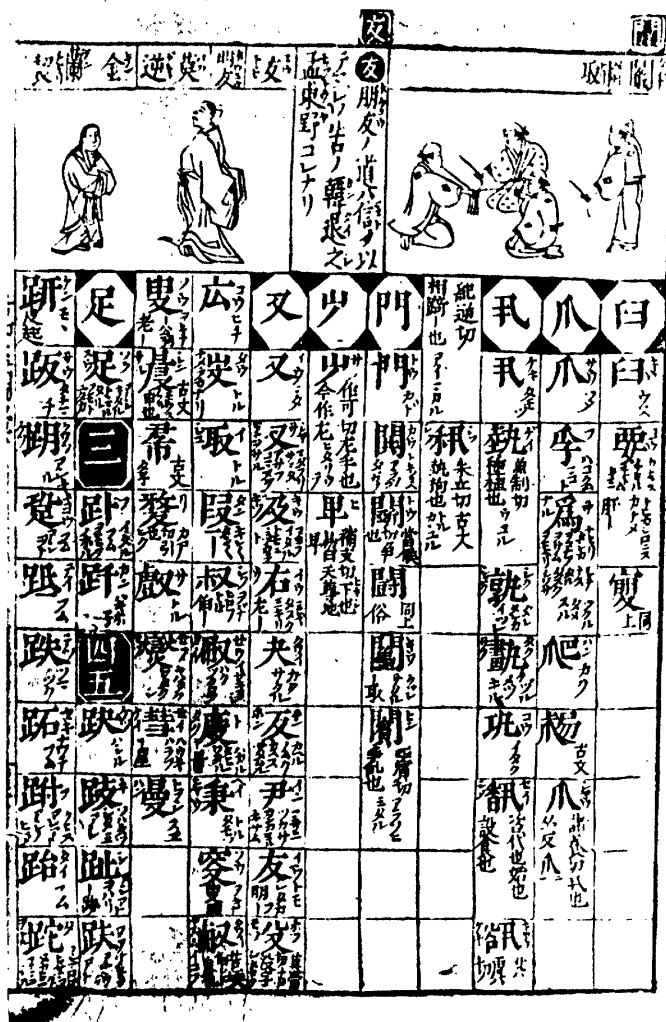
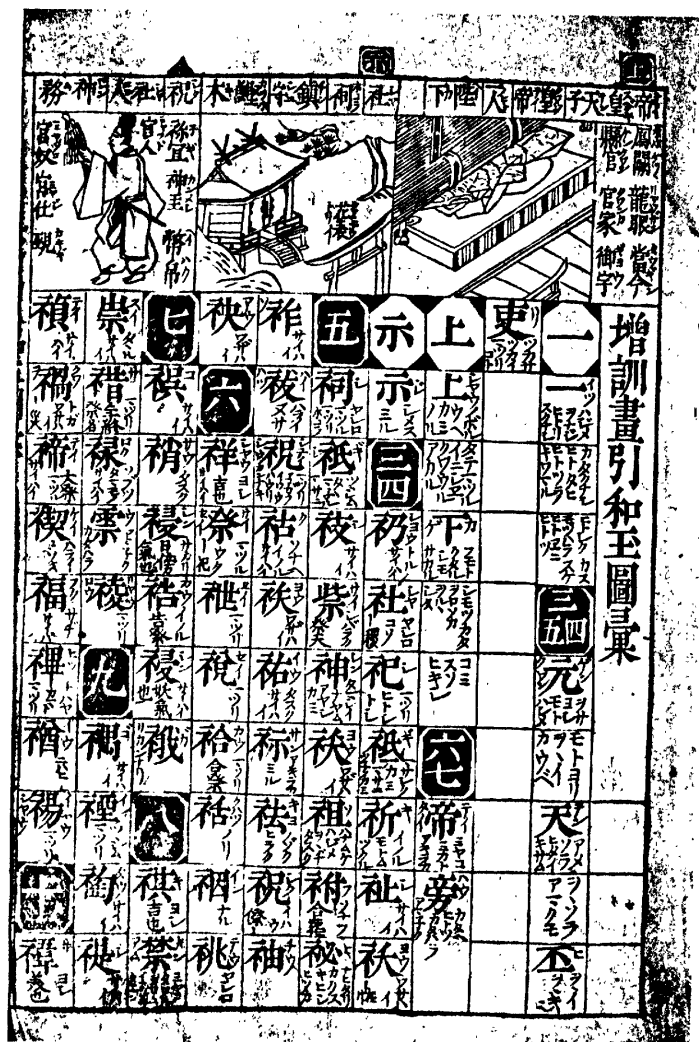


圖 版 二 十

此の小玉篇は落葉集の一部といふべく、落葉集第一頁は新村博士の南蠻廣記典籍篇の首に其の寫眞版を出せり。此の本に就きては前篇四二一頁を參照のこと。

小玉篇目録

[illegible]

十八 ○水 十九 ○ノ 女 ○邑 廿二

○車
○石
○穴
○田

○ハ
○ニ
○三
○四
○五
○六
○七
○八
○九
○十

{13}

ଆବେଦନ

一
 月
 以
 上
 FLOOR
 ●
 見
 の
 の
 照
 猪
 取
 情
 時

[illegible]

第
一
卷

[illegible]

27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547

[illegible]

福味勝財賄私肥
勝たへり財のなる賄ひたる私にふりたる

[illegible]

凡 例

一 本書は予の學位論文に刪補を加へたるものなり。刪とは論文には古逸叢書本を神宮文庫本や羅氏本によりて校勘したる札記を附せしが、今や東方文化學院にて原本全部を景印中なれば之を棄て、補とは圖書寮御藏の宋本、内藤博士珍藏の十二行本、玉篇要略集、耶蘇會士刊の小玉篇の解題や八十卷華嚴音義私記、法華經釋文、醫心方寫本等より得たる逸文を加へたるの類。

二 漢文を引用せるに、原形を存する要なきものは假名交り文に書き下せり。

三 和玉篇につきては畏友龜田學士の珍藏によりたる者多し。此等は其の和玉篇考を引き若くは其の事を明にして敢て人の美を掠めず。又宋・元・明本等は圖書寮、内閣文庫、京都帝國大學圖書館、神宮靜嘉堂、東洋尊經閣、成篋堂、安田の諸文庫、内藤新村兩博士、濱野君等が其の秘笈を閱するを許されたるによりて始めて之を記述するを得たれども、予の疎愚なると又同時に對覽するを得ざりしとの爲に其の翔實を悉さざりしかを懼るゝなり。

昭和八年七月